

うつわ紀行

— 兵庫県・丹波 —

丹波の土で、どこまで表現できるとか。 若手作家から感じる、丹波焼の熱気。

のんびりとのどかな丹波の里。山の傾斜に沿って、約2キロ圏内に窯元が連なっている。この近さが連帯感を生むのだろうか。丹波焼の若手陶芸家は、絆が深くともってもパワフル。今回は、丹波焼の可能性に挑戦する、20代〜30代の若手陶芸家集団「グループ窯」の中から3人に登場願った。



俊彦窯 清水 剛さん



まるで夕焼け空のような赤褐色から浅黄へのグラデーションが美しい。刻紋瓶子8500円。



実をイメージした、しましま注器1万6000円。



刻紋花瓶3万8000円。



分刻紋蓋物1万円。



刻紋片口鉢1万2000円。



●プロフィール
清水 剛 (しみず・たけし)
1975年兵庫県・丹波立杭生まれ。1999年京都市立芸術大学卒業。京都の今井政之氏、眞正氏に師事。2004年地元に戻り、父の俊彦窯で作陶。

「何回も塗り重ねる漆芸にも興味があったんです。ちょっとずつくりあげていくのが自分の性に合っているような気がします」と清水 剛さん。

棲が合わなくなる。曲面でも楀目がきれいにつくよう、楀目を通したあと土を盛り上げていくという。とても緻密な作業だ。「すべて土がやわらかいうちにやらないといけないんです」。時間との闘いでもある。

「今は、丹波の土と喧嘩しながら作陶しています。でも、歳を重ねても今の作風のままで、体力的にも無理。作風は変わっていかないとだめなんです。50代になる頃には、土と仲良くなっていたいですね。60代の父は、今、土ととても仲良しなんだろうなあと見えています。いずれは、そうになりたい」。土と喧嘩してまでも、丹波焼の可能性を追い求める清水さん。まだまだ喧嘩して、モダンでアートな丹波焼で目を楽しませてほしい。

繊細で彫刻的。夕焼け空のような赤褐色から浅黄へのグラデーションの瓶子、実をイメージした注器、アートな造形が目をひく蓋物など、色使いや斬新さが、モダンな着物と対峙した時の高揚感に似ている。「造形も色も、住んでいる地からインスピレーションを得ています。例えば、丹波の空だったり、木になっている実だったり」とグループ窯の代表でもある清水 剛さん。「丹波の土でどこまで表現できるのか」。挑戦している姿勢が作品に現れている。例えば、浅黄の色を出すのは、丹波の土と白化粧土を混ぜて、冷却還元して表現している。繊細な刻紋は、「室町時代の古丹波の技法、楀で縦方向に跡をつける『猫搔』からヒントを得たんです」。平面では、きれいに楀目がつくが、曲面では楀目が重なり、辻